中里介山全集

第八巻

筑摩書房

中里介山全集第八巻
昭和四十六年三月三十日発行

著者　中里介山

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行者　竹之内静雄

東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所　筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京四一二三
印刷　株式会社厚徳社
製本　株式会社矢島製本所

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 71708 (出版社) 4604

目　次

勿来の巻（つづき）　5
弁信の巻　114
不破の関の巻　308
「机竜之助」論（田中智学）　363
「大菩薩峠」の映画化と舞台化（佐藤忠男）　366
解　題（八）（南波武男）　380

函·装画·横山大観

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大菩薩峠

第八巻

勿来の巻（つづき）

二十七

煙にまかれて、雨戸をしめきったお雪ちゃんは、次の間へ飛んで出て、
「久助さん、久助さん、火事ですよ」
と言い捨てて、そのまま、あわただしく二階へかけ上ってしまい、
「先生、火事でございます、早くお仕度なさいまし」
言われるまでもなく、この時、竜之助はもう心得て、身のまわりのものを掻き寄せていたところでした。
「お雪ちゃん、気をつけるといい、火事の時は、明るい方へ逃げないで、暗い方へ逃げるものです」
「先生、早くなさいまし」
お雪ちゃんは、竜之助の手を取って引立てようとしたが、人を急き立てる自分こそかえって、あわてていて、ねまき一つのまんまで騒いでいるのに、竜之助は、身のまわりのもの、少なくとも大小、懐中物だけは、抜かりなく用心した上に、頭巾を手に取り上げています。
「さあ、降りましょう、あゝ、いけません、こちらは明るい、この裏梯子から」
「あゝ、先生、わたしは、もう一ぺん自分の座敷へ戻らねばなりません」
「それは危ない」
「でも……」
「命には代えられません」
その裏梯子を下りる時には、お雪ちゃんが竜之助を導くのではなく、むしろ、竜之助がお雪ちゃんを抱えて、静かに下りて行くのを見ましたが、火は、煙は、遠慮なくその後を追いかけて、姿そのものを捲き込んでしまいました。

こうして二人は、ほんとうに身を以て、裏梯子から、すぐ家の欄の下の桟橋に立って、河原を走ることになりました。

お雪ちゃんこそは、全く身を以て逃れ出たもので、自分が一番先に発見したという立場から、まずもって急を久助さんに告げ、その足で、二階へ、竜之助に告げに行った。その次の仕事としては、もう、どうしても自分の部屋に戻ることはできませんでした。

部屋そのものに名残りの残るわけではないが、そこには、自分の身のまわりの一切のものが置捨てられてあったのです。

一切のものというちに、その数々を挙げてみるよりは、その中から取り出し得たものは、この身体と、この身についた寝巻一着だけ、という方がわかり易いでしょう。しかも、この寝巻は自分のものではありません、帯までが宿のものなのです。

河原の真中へ来た時分に、盛んに燃えている自分たちの座敷のあたりを見ると、お雪ちゃんは急に恐ろしくなってしまいました。

あゝ、なんだって自分は、こんなに、はしたないのでしょう、せめてあの帯揚だけも、あの手文庫だけも、あの紙入だけも、立ち上る途端に、しっかりとここへ挾んで来ればよかったものを——命より大事なものは無いと言いながら、旅に出ては命同様の役目をする路用の一切を焼いてしまった、ほんとに明日からは、どうするのでしょう。

久助さんは……久助さんは、どうしたろう、あの人は耳が少し遠いから、わたしがああ言って呼んであげたのがわかったかしら。わからなくても子供ぢゃなし、逃げ出せないはずはないが……

お雪ちゃんは、ようやく、河原の中程へ来て、わが身のことと、人の身の安否を考えたが、どちらもたよりないことばっかり……でも、肝腎の目の見えない先生が、こうして御無事に……と思う、そればかりが心だのみでした。

「もう大丈夫ですねえ、先生」

自己慰安を求めるもののように、こう言ったが、盛んに燃えさかる火の手が、河原の表面を、昼のようにかがやかすと、避難の者が、いずれもこちらへ、こちらへと走りかかるのを見て、またも不安の念に襲われました。

二十八

火に追われるのは怖れないにしても、人目に触れさせたくない心配はある。

まもなく、川下の森のようになった柳の木蔭で、探し当てたのは、つなぎ捨てられた屋形船の一つです。夏になると、この宮川が屋形船に覆われて、花柳の巷が川の上へ移される。今は誰も相手にする者のない捨小舟。

船の中をなおよく見ると、蓆や、ゴザが、丸く巻いて隅の方に積んである。お雪ちゃんは、その敷物をしいて、竜

之助をその中に休ませました。そうして置いて言うことには、

「先生、わたしは、これから火事場の方へ行って参ります、久助さんの身の上も心配だし、もしかして、わたしの荷物を、宿の人が出してくれたかも知れません」

「行っておいでなさい」

「お寒いでしょうけれど、暫く御辛抱なすって下さいね」

「寒いぐらいは何ともありません」

「その代り、わたしが宿の人に頼んで、直ぐによい避難所を探して来てあげますから」

「あゝ、何しろ火事場はあぶないから、怪我をしないようにね」

「大丈夫、先生こそ、お風邪を召さぬように」

「なあに、わしは大丈夫だ」

と言いました。

暗いから、よくわからないけれども、竜之助は、お雪ちゃんのように寝巻一枚ではなく、急の場合に、手まわりで身づくろいの出来るだけのことはして来ているようです。ですから、ここで、うたたねをさせて置いても、そんなに急に風邪をひくようなこともあるまいと思われるのに、自分は、ホンの寝巻一枚――急にゾクゾク寒気がしてきました。

気がついてみれば、自分がこの人を呼びさまして、連れてここまで避難して来たというのは全くウソで、事実は、この人に自分が抱えられて、裏梯子を下り、小川を飛び越え、河原を走って、ここまで来たのだということが、この時、はじめてわかりました。

途中、緊張しきって、我を忘れていたものですから、そこは水でございます、そこに石があります、あゝ大きな穴が、あぶない――と、走りながら、自分は幾度か警告したのは口だけで、そう言いながらここまで走って来たと思った自分は、実はこの人の小腋に抱えられて、自分が口だけの案内者に過ぎなかったということが、この時、ハッキリわかりました。

その証拠には、自分は全く素足で、履物というものを穿いていない。それは途中で脱げてしまったのではなく、最初から穿いて来なかったので、穿いて来る余裕の無かったということは、今となって明らかにわかります。

かりにも履物をつけないで、あの河原道をここまで走って来れば、足が裂けてしまっているに相違ない。それだのに、自分の足はなんともないではないか。それが、ハッキリわかってみると、お雪ちゃんは、いくら先走って世話を焼くようでも、女は女――という引け目を、しおらしく感じてしまいました。

同時にまた、こんなに病身で、ことに肝腎のお目が悪いのに、それでも足許を誤らずに、この石ころ高い河原道を、わたしというものを抱えながら、ここまで連れて来て下さった先生は、えらいと思わないわけにはゆきません。

危急の場合にはどうしても女は女で……と感ずると共に、男である以上は、こんな不自由な身であっても、胆の据え方というものが違うのぢゃないか知ら——とお雪ちゃんは、今更のようにそんなことを感じ、一時、こんな気持でボンヤリしましたけれども、いつまでもボンヤリしている場合ではなし、

「では、先生、一走り行って参りますから」

と、三たび暇乞いの言葉を残して行こうとしますと、竜之助が、

「お雪ちゃん——草履をはいておいでなさい」

と心づけてくれました。

「まあ」

そんなこと、細かいことまでわかるのかしら……お雪ちゃんは、眼のあいた人と、眼のあかない人との地位が、顚倒しているのではないかと思いました。

二十九

そうして置いてお雪ちゃんは、再び火事場へ取って返しました。

たいした風はなかったのですけれども、乾ききっていたところへ、消防の手が不足のせいだったのでしょう、火勢はいよいよ猛烈で、ほとんど手のつけようがない有様でした。

橋を渡って、火が対岸へ燃えうつろうとしているのを、必死で支えるだけが消防隊のする全力の仕事のようでした。

ですから、ほとんど火事場へは寄りつけない、のみならず、火を避けようとして、逃げ出す人波と、荷物とに押されて、空しく押し戻されるよりほかはありません。

その逃げ迷う人波の中に、せめて久助さんの姿でも見出したいものと、河原を廻って後ろからのぞんで見ましたけれども、それらしい人を見ることができません。

ぜひなく、また河原道を、屋形船のところまで舞い戻るよりほかに為さん様がありませんでした。

この戻りにも、何といって一つ、獲物らしいものを持って来ることができない悲しさ。せめて、あのお金入の一つさえ持っていたならば、この戻りに、廻り道をしてなりと何か一品——さしあたっての一夜の凌ぎになるものを買って戻れるものを、それもできない。まして借りるところも、貸すところも——手ぶらで出でて、手ぶらで帰るよりほか、何事もできない自分を、歯痒いと思いました。

けれども、今の場合では、どうしても、そうして手ぶらで帰るよりほかに道はありません。せめて手ブラでなりと無事に帰って、人を安心させ、自分も安心して、この一夜を明かしてから、万事はその後——と、そう心を決めるほかはありませんでした。

そうして、大火の火影に照らされながら、河原道を飛んで、時には、水たまりへぐちゃりと足を入れたりなんぞし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て、前をながめ、後ろを顧みながら辿って行くと、草むらの中に、ひときわ白いもののあるのが眼につきました。

「おや？」

白い、長い、箱のようなもの、遠火の光にあおられてありありとそれを見出したのは、やっぱり長い箱に相違ありません。

長持にしては白過ぎると思いました。

でも、それが何のために、こんなところに存在するかを想像するのは難事ではない。大事なものを持ち出して、ワザとこんな遠くへまで置きっぱなしにして行ったのは、もうげんじたわけではない。火事に顚倒して、我を忘れた狼狽の沙汰ではない。荷物を持ち出す時の目測では、もうこの辺まで持ち出せば大丈夫、と安んじていたものが、いつしか、火勢に先んぜられて混乱の渦に没してしまうことが多い。そんな途方もないところまで運ばなくてもと、物笑いになるほどの心配がかえって賢明に、安全を贏ち得るということはよく経験するところです——お雪ちゃんは歩むともなく、その置きっぱなしにされた白い、長い箱の傍に寄って見ると、果して長持ではない。

「おや——」

前のは単なる驚異でしたけれども、今度のは、恐怖を伴う叫びでした。

何です、これは、縁起の悪い、棺ではありませんか、寝棺ではありませんか。おゝいやだ、寝棺が捨てられてある。

お雪ちゃんはそれを見まいとして走りました。

あれだけの寝棺では、かなり立派なお家の葬式であろうけれど、入棺間際に火事が起って真先にあれを担いで避難はしたが、死んだ人よりも、生きている人の難儀の方が大事である場合、ぜひなく棺はあのままにして、また火事場へ取ってかえしてしまったのだ。

それにしても、この際、棺をここまで持って来て避難させるまでの熱心があるならば、誰か一人ぐらいは、ここに番をしてあげたらよかりそうなもの、よくよくの場合とはいえ、捨てられた仏がかわいそうぢゃないか、ひとりでこんなところへおっぽり出されて、もし狼か、山犬にでも荒されるようなことがあったならば、いっそ、火事場へ置いて焼いてしまってあげた方が功徳ぢゃないかしら。

お雪ちゃんはこんなことを考えながら、眼をつぶって屋形船の近くまで走って来てしまいました。

三十

この屋形船の中で、竜之助とお雪ちゃんは一夜を明かしたのです。

夜が明けると、お雪ちゃんは竜之助に断わって、再び火事場へ出て行きました。

昨晩は、近寄れなかったが、今朝は、もう火も鎮まってみれば、行けないことはない。第一に久助さんの行方——

それから自分たちの荷物の安否、それから宿屋の主人に向って善後策の交渉――そんなことを、いちいちこれから切盛りをしなくてはならないと、雄々しくも心を決めて、寝巻一着を恥かしいとも思わず――恥かしいと思っても、この際、どうすることもできないのですから、そのままで、焼跡の方へ出かけて行ってしまいました。

船の中に、ひとり残された竜之助は、肱を枕に横になると、天地の狭いことを感じません。

このごろでは、よいことに、夢ではなく眼をつぶって、息を調えて沈黙している間に、さまざまのうつつの物を見ることです。曾て見たことのある山水や、人物が、うつつとなって、沈思閉眼の境に現われて来て、甘美なる幻像に喜ばさるるの癖がつきました。

これは、そうするつもりがなく、白骨の閑居のうちに、おのづから養われた佳癖ということができましょう。それは曾て自分が実見したことのある山水のみならず、人がさまざまに語り聞かす物語を、自分が閉眼して、いちいち絵に描いてみることができるようになったもので、白馬ケ岳や、槍ケ岳や、加賀の白山や、越中の立山が、みんな実物以外の想像となって、竜之助の眼底にありありとうつってくるのです。そうしてまたお雪ちゃんの話しぶりというものが、その想像を助けるのに最もふさわしいものでありました。

白骨の炉辺閑話でも、そこに集まる冬籠りの人たちの風采を、お雪ちゃんの話によって、いちいち想像に描いてみては、それらの人と共に語るような思いもするのです。時として、イヤなおばさんだの、仏頂寺弥助の一行だのといったようなのが、苦々しい幻像を現わすこともあるが、概して、自ら描いて見る風景と、人物とは、特殊な甘美なものがあって、自己陶酔には充分なのです。

その幻像から来る自己陶酔を楽しむことができるようになった竜之助は、性格的にどれほど恵まれたかは知れないが、時間的には、たしかに、退屈ということを忘るるの術を授けられたようなものです。

平湯から、こちらでは、その機会の少なかったのは、沈静から流動へと移った旅程のあわただしさでしょう。昨夜の火事の前なども、うつらうつらとその夢幻の境に引き入れられようとして、引き戻されたのではあるまいか。

今は、しばらくその時が与えられた。空想の幻像によって、窮居の無聊を救うの術を覚えたことの応用は、この辺だと心得たものでもないでしょうが、肱に枕をすると、眼を眼中に向けて、想いを雲煙の境に飛ばしました。しかし、幻想といえども、境遇と離れては成り立たないものと見えて、竜之助の夢うつつは、昨夜来の出来事と、そうして自分にかしづいているお雪ちゃんの面影の外には、出でることができませんでした。

あれから、夜の白むまでの半夜を、この狭いところに明かし合って、眼がさめた時の、お雪ちゃんの言葉が、

「先生、お寒くはございませんでした？」と、こういうのです。

寒くないかと、見舞を言ったお雪ちゃんその人が、かえって寒さに顫えている面影を、竜之助はありありと見ました。

寝巻一着のほかに、なんにも無くて、自分を顧みるよりも先に、人の安否のために奔走したお雪ちゃんの最も好意ある狼狽を、竜之助といえども充分見て取っているのでしょう。

自分はあの際にも、できるだけの身ごしらえはして来ているから、寒くはない。寒いといっても知れたものだが、お雪ちゃんは、あれから間もなく夜明けではあったものの、その間、寝入ったようなふりをしていたが、まんじりともしなかったことを、竜之助は知っていなければならぬはず。

三十一

竜之助も、あの子にだけは、どう考えても悪意を持つ気にはなれないらしい。

お雪ちゃんという子を、竜之助は、どんなように想像しているか。女というものについては、お豊である限りのほかの女は、竜之助の肉眼での女というものは無いのです。

どのみち、女というものの運命も、他の生物の運命と同じことに殺してしまうか、殺されてしまうのが落ちだ。

竜之助は、お雪ちゃんを可愛ゆいと思わないことはない。可愛ゆい子だと、身に沁みる時に、また一方に極めて冷たいものがあって、こいつもまた、今まで、経来ったあらゆる女と同じ運命の目を見せてやる時が来るのかな――とあざ笑うこともある。

いつのまにか、自分が愛すれば愛するほど、自分が愛せられれば愛せられるほど、そのものの運命のほどを、じっと最後まで見詰めてやりたくなる癖がある。

生かすこと、殺すことのほかには、竜之助の天地は無いのだ。

たとえば、現在はどうあろうとも、運命がこの二つに過ぎないことは、見え過ぎるほど見えている。愛着がしばしの戯れと思われて、彼は何人の捧ぐる好意にも、感謝というものを持つことができない。

それでも、お雪ちゃんその人には、感謝はできないながら、悪意を持つことまではできないで、そうしておのづからその残虐なる遊戯性が、この子の前では、萌して来ないことを不思議と言えるでしょう。

いかなる女をも、最後は、必ず自分が手にかけて殺してしまう――こういう自覚せざるの自信に充ちている竜之助も、まだお雪ちゃんを殺そうとはしていないらしい。結局はそこへ行かねばならないことを怖れているのは、弁信法師ひとりで、お雪ちゃん自身も、一向それに気のついている様子はない。

弁信に対しては、竜之助は、ほとんど無関心でいることのできる、これも一つの不思議な存在でありました。

神尾主膳は、弁信の存在を、この世のなにものよりも憎み、嫌い、憤り、その名を聞いてさえも、渾身の憎悪に震え上り、ひとたびその声を聞き、その姿を見た時は、打ち殺し、打ちひしぎ、裂き砕いて、この世での存在はもとより、想像をさえも掻き消したがるほどの関心を持っているのに、竜之助は、あのおしゃべり坊主に対しては、水の如き執着をしか持っておりません。

甲州の月見寺で、むらむらと彼を斬りたくなり、その身代りに卒塔婆を斬った途端に、その執着が水の如く、身内を流れ去って以来、彼の存在を、あまり気にしているということを知りません。

そのほか、考えてみれば、自分は、自分に降りかかって来る者のほかには、不思議に執着を持たない身であることを感ぜずにはおられません。むらむらと自分の身に湧き出す、如何ともすべからざる力に、ふと外物がひっかかった時が最後——そのほかには、自分は憎むべくして憎むべき人を知らない、殺すべくして殺すべき人を知らない。

こんなことを、うつらうつらと考えている時に、外で声がしました、

「先生、喜んで下さい、久助さんがいましたよ、見つかりましたよ」

さも嬉しそうな呼び声、焼跡へ出かけて行ったお雪ちゃんが帰って来たのです。

その、たまらぬほど嬉しそうな声によって見ると、お雪ちゃんは、久助を焼跡で見つけたのみならず、ここへ伴って来たことの有様が、ありありと想像されます。

途中で、一度は、どうしたら久助さんをまいてしまえるか知ら——と、ひそかに苦心したお雪ちゃん自身が、今は死んだ子が生き返りでもしたように、喜んで帰って来た心もち、我儘といえばこの上もない我儘、自分勝手の行き止り、お雪ちゃん自身でもそれを考えてみればおかしくはないか。

船の外には、お雪ちゃんが先に立って、久助さんが何か荷物を一背負い背負い込んで立っているのに違いありません。

三十二

二人が火事場の模様を話して聞かせるところによると、延焼区域は一の町、二の町、三の町、目ぬきのところをすっかり。後ろは錦山、前は橋を焼いて向う岸までも嘗めたところがある、近頃での大火であったこと。御同様、焼け出されの者が多いこと。その焼け出されに不思議と着のみ着のままが多いこと。でも町内と代官の手廻りがよくて、いち早く炊出しもあるし、罹災民の救助方もかなり行届いているとのこと。

久助さんも、最初お雪ちゃんの警告を聞いて、飛び起きたが、飛び起きた時は、もう火が迫っていたので、御多分に洩れず、着のみ着のままで飛び出したが、今朝になって、古着や炊出しの恩恵にあずかり、こうして背中に一荷物しょい込み、なお炊出しの握飯を竹の皮包にして、ここへ持ち込んで来たものです。

そうして、二人で宿の主人にかけ合ってみたが、宿でもほとんど家財を持ち出さなかったくらいで、お客様の方に手が及ばなかったことを、繰返し詫言を言われてみると、結局、身一つだけが持ち出されたということに、あきらめをつけるよりほかはありません。

しかし、代宿としては、今の宿が責任を以て心配してくれ、相応院というお寺を借りて、そこに泊っていただくことに交渉がついていますから、あれへお越し下さいませ、万事は、のちほどの御相談ということで、一応の解決はつけて来たのでした。

そういうわけで、もう一晩、この屋形船の中で辛抱し、明日になれば、お寺へ引移ろうという相談になって、それから、お雪ちゃんと久助さんとが申し合わせて、さしあたっての急場の凌ぎです。そのために久助は出て行きました。お雪ちゃんは、久助の持って来た炊出しの握飯を竜之助にもすすめ、自分も食べてみて、はじめてお腹のすいていたということをさとる始末です。

それでも、お雪ちゃんにしても、久助さんにしても、お救い米を貰いに行く気にはなれないのです。こんな非常の際とはいえ、なんだかきまりが悪くて、風呂敷や、袋をさげて、焼跡へお救い米をもらいに行く気にはなれないが、さりとて、着のみ着のままで、焼け出されの旅の身、親類が一人あるというわけではなし、明日からの当座の宿所はお寺ときまっても、それから後がまた心配です——故郷までは長い道のり、たよりをすることも、金を取寄せることも、この場合、間に合うはずがありません。

よし、忍んで、お救い米にありついたとしてからが、それが幾日つづこう。

路用や、貯えの一切を焼いてしまった上に、せめて、頭の飾りとかなんとかひとくさでも残っていれば、多少とも急場を救うの金目にならないとも限らないが、それすら無いのですから、一時はこうして人の好意につながっていても、不安が目の前についている。

どうしても、何とか当座の凌ぎをつけておいて、久助さんを国へ立たせなければならぬ。

久助さんを国へやるか、この地で飛脚を頼むかするよりほかはないが、飛脚では安心のなり難いこともある。ぜひ、どうしても久助さんに行ってもらわねば……先日は、かりそめに邪魔にした久助を、今は、一にも二にも恃む心になったのも勝手なものだが、その恃みきった久助さんとても、仮りに最大速度で走ってくれたところで、往復に二十日はかかるでしょう。

その二十日の間――二十日たって帰るものならいいが、今の時節、途中で、もしものことでもあったらどうしましょう。

この際に、お雪ちゃんが、「遠くの親類より近くの他人」という諺をしみじみと思い、身に沁みました。

親類でも、実家でも、遠くにあってはなんにもならない。これは、いっそ、近くの他人……他人へすがるよりほかはあるまいけれど、こんなところで、すがるべき他人を見出すことがむづかしい。どうしたものだろう――お雪ちゃんは思案の揚句、ふと胸に浮んだのが、白骨温泉に滞在している人たち、わけて北原さんのことです。

あの北原さんに便りをしてみようかしら……近くの他人といえば、あの人よりほかはない。

甲州までは大へんな道のり、白骨はほんの十里内外――久助さんに、面をかぶってひとつ白骨へ行ってもらおう、そうして北原さんに事情を打明ければ、この急場を凌ぐに最もよい知恵を貸して下さるに相違ない――そうだ、では北原さんに手紙を書きましょう。

お雪ちゃんは、こんな気持になって、明日、お寺へ落着いたなら、真先に北原さんへ手紙を書こうと決心し、それから、

「先生、こんなことなら、あなたを白骨にお置き申した方がようございましたねえ」

と、所在なさそうな、転寝の竜之助を見て、なぐさめの言葉をかけました。

「こんな世話場も、面白いものだ」

「ほんとうに、思いがけない世話場を出してしまいました、これも、あのイヤなおばさんの祟りかも知れません」

とお雪ちゃんが、なにげなく返事をして、かえって自分が変な気になりました。

世話場は世話場でいいが、なにもイヤなおばさんの名前なんぞを、ここに引合いに出す由はないのに、口をすべらして、自分でイヤな思いをし、人にイヤな思いをさせることを悔んでみました。

「そうかも知れないね、あのおばさんの魂魄が、ついて廻

二十三

白骨を出る時は、こっそりと、だしぬけに出て来てしまっているから、皆さんも気を悪くしていらっしゃるだろうが、それには、そうしなければならぬわけがある。でも、なにも皆さんのために、あとを濁して来たというわけではないから、申しわけをしさえすれば、話はわかってもらえる。

あの冬籠りの人たちは、いずれも一風変った人たちではあったけれども、なかでも北原さんがいちばん気軽で、わたしとは気が合っていた。口は悪いけれども、全く親切気のあった人。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com